季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉

通巻22号

夏号

2006

6,7,8月

【かみえちご山里ファン倶楽部】

●未来への卵●

新しいクニのかたち

小川未明と春日山

人は夢によって生かされる

巻頭エッセイ◉このまちのこと

あたりまえの風景

◉この人に学べ◉

有徳の人

山田辰治

配流800年 親鸞の風景

2. 親鸞と妻恵信

【カメラの眼】

日宮神社の人たち

季刊 直江の津 第22号 夏号
2006—6・7・8

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
あたりまえの風景　草間敬子　3

■配流800年 親鸞の風景
連載2　親鸞と妻恵信　松野純孝　4

■かみえちご山里ファン倶楽部
未来への卵
新しいクニのかたち　関原　剛　6

■講演
小川未明と春日山
人は夢によって生かされる　小川清隆　12

■この人に学べ　山田辰治　19

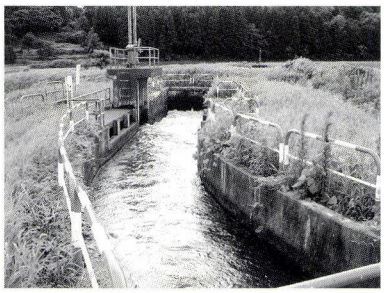
■カメラの眼　22

■読書びと
まなこつむれば……　敗戦野菊をわたる風
吉田直哉著　26

■建物さんぽ　24

■上越産業振興研究所レポート　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



田を潤す水の旅立ち
（上江用水・板倉区）

♣巻頭エッセイ
草間敬子さんのこと

昭和48年　北海道小樽市生まれ
小樽の高校を卒業後、山梨県の都留文科大学へ。
平成8年度より上越市教育委員会学芸員。
春日山の麓の上越市埋蔵文化財センターに勤務。
雪が再び降り始める頃まで、炎天下の発掘現場でお目にかかることができるかもしれない。

あたりまえの風景

草間敬子

このまちで暮らし、十年たつ。道産子の私としては、このまちのあたりまえの風景の中に、初めて経験すること、驚くことがたくさんある。

夏は、本当に蒸し暑い。でも、この蒸し暑さがおいしいお米を作るのだろう。夏野菜は、種類が豊富で新鮮。ただ、初めてお味噌汁の中に胡瓜が入っていた時には、本当に驚いた。

秋。北海道には、柿の木がない。売られている柿はやわらかく、汁が垂れないようすすりながら食べる。柿の木は、雛飾りで見るだけ。だから、初めて本物の柿の木を見た時は本当に感動した。このまちで結婚し、嫁ぎ先には四本の柿の木がある。結婚して初めての秋、実家の母に好物の干柿を沢山送りたくて、軒下に百個近い渋柿をぶらさげた。残念ながらそれらは完成間近で緑色のカビに覆われ、母には柿の写真とカビを免れた干柿数個を送るだけとなった。晩秋には、葉の落ちた柿の木に柿がぽつんと残されている風景をみかける。お茶の先生から、千利休がそんな柿になぞらえ、「木守り」と名付けた楽茶碗があることを聞いた。それを知ってから、晩秋の木守り柿を見るのも好きになった。

冬。北海道の冬は、十月頃からふわふわの白い綿毛を付けた小さな「雪虫」が目や口に入るほど飛び交い、その後いつのまにか虫が雪に変わる。晴れていても雪は降る。このまちの冬は、雪起しの雷から始まる。灰色の空が黄色みを帯びてきたらもう危ない。雷が大の苦手な私としては、本当に勘弁して欲しい。一晩で一メートル近い雪が積もり驚いたこともある。重い雪が屋根に貼りつき、登って降ろさなければならないことを知った。かんじきも初めて。一番驚いたのは、水で雪を解かすことだ。

そして春。幼稚園の頃だったか、雪が残る春先、どうしても土が見たくて移植鏝で雪を掘り返していたら福寿草の黄色いつぼみが見えた時のうれしさ、新鮮さは今でも覚えている。故郷とこのまちの冬は違うけれども、春を待ち遠しく思うこの気持ちは、雪国共通のものなんだろうなと思う。

ここは、普段の暮らしのなかで自然に歴史に触れることのできる場所だと思う。我家の畑を耕すと、たまに土器片が見つかる。集落内では、屋号で呼び合う。蔵をのぞくと、唐箕など古い農具がある。庭には、使われなくなった石臼が積まれている。どれも、あたりまえのようにそこにある。

このまちの暮らしは、気がつくと故郷で過ごした十八年間を上回るのだろう。このまちに慣れる一方で、道産子の目で気付くことのできるこのまちらしさを見つけ、大切にしていきたいと思う。

配流八〇〇年

親鸞の風景

●連載2

親鸞と妻恵信

松野純孝

京都で結婚した二人は子供を連れて配所上越に来た。承元の法難で斬首、遠流という極刑に、親鸞は、「主上臣下、法に背き義に違し」と激しく抗議している（傍点筆者、以下同じ）。天皇もその臣下達、共に真実の法に背き、人の道に違すと。専修念仏はただ特定の人でなく、誰でも何時でも何処でもできる平等を根としている。「虚空のごとく差別なし」、大地は一切を能く載養する。かく諸法＝万物の正体は差別なく、平等である。そうした平等を根とする専修念仏者を極刑に処すとは、親鸞にはどうしても納得できない。ところが親鸞が如何に絶叫しても応えがない。かくて平等に応えのない世の中が厭になり、ニヒルになっていったのではないか。

恵信は晩年京都から上越に帰ってくるが、京都の末女尼覚信から親鸞の訃報に接し、親鸞について次の三つのことを知らせ、親鸞が真実浄土に往生したことは間違いないとしたのである。

第一はまず親鸞は何故に自力の旧仏教を捨てて法然の専修念仏に帰したかについて述べる。恵信の原文を掲げたいが、紙数の関係で原文にそって要点だけ摘記する。

殿（親鸞）が比叡の山を出て、京都の六角堂に百日籠り後世のことを祈ったところ、九十五日目の明け方、聖徳太子のご示現を蒙ったので（この文を周到にも別紙に記して同封している）、直ちにそのままその明け方、堂を出て後世のたすかる縁に遇いまいらせんとて法然上人の許を訪ね、お遇いし、それからまた百日六角堂に籠ったようにまた百日の間、降るにも照るにも、どんなに大変な支障がある時も、法然の許へ参り不審を納得のいくまでたずねた。上人はただ後世のたすかることは、善人であろうと悪人であろうと差別なく、同じように生死の迷いを出ることのできる道をただ一筋に説かれたのを承り、これこそと心を定めてしまったので、たとえ法然上人にだまされて悪道に堕ちても後悔しないと、専修念仏に帰したというのである。親鸞はこのことを「愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」といっている。二十九歳、念仏以外の一切の自力の雑行を棄てて、本願の他力に帰したと。この二百日、実に半年以上にわたる自力との悪戦苦闘から本願他力への転入の経緯をこれほどまでに的確に表現しえたものは他になく、恵信は親鸞



と重なっており、他力の信を獲得した証としてよいのではないか。法然の人と思想も実にずばりよく言い得ている。

ところでこの雑行を棄てて本願に帰したはずの親鸞がまだ動揺するのである。

第二。寛喜三年四月十四日の午（うま）の時頃から親鸞は風邪ぎみになり、その夕さりから臥して重体となったのに「てんせい」看病人をも寄せつけず、ただ音もせずして臥していた。恵信が「御身をさぐればあたゝかなる事火のごとし」と。さて臥して四日目にあたる明け方、苦しいなかにも「まはさてあらん」と仰せられたので、うわごとに申されたことですかと申すと、「たわごとにてもなし」、臥して二日目に当たる日から大経を読むことひまもなし。たまたま目をふさげば経の文字が一字も残らず、きららかにはっきりそのまま見えてくる。さてこれこそ心得ぬことだ。念仏の信心よりほかには何事か心にかかるべき、と思ってよくよく思案してみると、この十七、八年ほど前、衆生利益のためにとて三部経を千部読んで、「これはなにごとぞ、じしんけう人しんなんちうてんきやうなむ」といって、名号のほかにはなにごとの不足があって、必ず経を読まんとするや、と思い返して、経を読むことは止めてしまった。それなのに、なおも少し読もうとする気持ちがまだ残っていたのか。「人のしうしんじりきのしんは、よく〳〵しりよあるべし」と思いなしてのちは経を読むことは止めてしまった。さて臥して四日目の明け方、「まはさてあらん」とは申したのだと。やがて汗が出つくしてよくおなりになった。右の「じしんけう人しんなんちうてんきやうなむ」は『教行証』に引用されている善導の言葉「自信教人信難中転更難」で、私達には皆目わからないが、恵信はちゃんと分かっており、親鸞と話がよく通じていたのである。恵信の書写とされる『音讀大経』の断簡がある。この文中から親鸞の『教行証』や『浄土和讃』に引用されており、恵信は親鸞の『教行証』や三部経を暗誦していた。恵信はこの記録に誤りあるのをその時の日記により知り、四月四日から八日目に当たる十一日の明け方、経読むことは止めたと、後便で訂正している。

親鸞のこのような人の執心自力の心（しん）の迷いはこの五十九歳から十七年前の、親鸞一家が越後から常陸への移住の途上（親鸞四十二歳）、親鸞の三部経千部讀誦に見えるが、この時は、はじめてから四、五日ばかりして思い返して止めたと恵信はこの手紙の終りに記している。この年月日と時刻までをも克明に記録しているものも他に見出せない。恵信は雑行を棄てて本願に帰すことを自らのものとし、生涯をかけていたのである。

第三。同じく常陸へ移住の途次、恵信はただひかりばかりと親鸞が観音の化身との夢をみた。ただひかりばかりの夢は法然の勢至菩薩の化現に関するもので、色も形もないただひかりばかりの夢も他に見えないようで、法然に関する数多の夢では筆頭格のもの。真の仏は色も形もないただひかりばかりのものだが、そうした夢をみたのである。恵信は親鸞より九歳年下で、第二、第三のものはまだ三十三歳の若さのもの。すごいの一言に尽きる。

親鸞に関する恵信の右の三つの原文は饒舌はなく、一言一句綿密且つ入念な吟味によって綴られている。恵信の他力の信の境位がにじみ出ている。

かくして恵信は親鸞の最初の弟子であり、また親鸞の最もよき理解者であった。ここに親鸞はニヒルを超えて、生命と歓喜の爆発する上越の大地に腰をすえ、一家は一つ鍋からはじまった。

仏教学者／上越教育大学名誉教授・元学長　上越市牧区東松ノ木・一念寺



かみえちご山里ファン倶楽部

未来への卵 桑取谷 新しいクニのかたち

関原 剛・かみえちご山里ファン倶楽部 専務理事

桑取谷の磁力

桑取谷の夢を見る。

それは寝て見る夢ではない。起きて正気で見る夢だ。

その夢に集う人たちがふえている。村のひと。街のひと。若いひと。都会のひと。それぞれの夢は違うだろうが、違いながらどこか似ている。その人々が、それぞれの夢を描く場所。桑取谷とは、そのような強い磁力のひそむ場所である。

南葉山から五智につづく稜線に始まり、はるか糸魚川までつづく山塊の小さな谷たち。西浜(にしばま)七谷と呼ばれる谷の連なりの、一番直江津寄りの谷が桑取谷である。この谷は、桑取川によってつくられた。籠町南葉、重倉山といった山塊を源とし、わずか一五キロで海まで駆け下る桑取川。そして谷の高台から望むと、屏風のように連なる頸城連峰。この屏風にせき止められ、大量に降る雪もまた、解けてこの桑取川を流れ下る。

桑取谷の磁力を読み解く鍵とは、ゼロメートルの日本海から二千四百メートルの山塊を往還する谷独自の水の大循環系にある。海山具足の閉じた水循環系とは、いわば小さな地球を意味する。桑取谷が小さな地球であることが、さまざまな人々がこの谷に同じような夢をみる理由なのである。空気、水、森、材木、米、野菜、魚貝、塩、そして人間、歴史、文化、これらすべてをまかなえる自給性と、それを続けてゆける持続性をもつ土地こそが、これからの未来に必要な「答え」の集合体であるのかも知れない。そのような意味で、今日、人々が桑取谷をみつめるのは、過去の回顧やノスタルジアからではない。むしろ人々





JR 有間川駅
美しいたたずまいの駅舎も今は無人駅。村の寄付で建てられた。

の未来を模索する目が、この桑取谷を見つめるのである。

桑取は約千年前の文献資料（大日本国法華験記）に初見があり、以来その存在を継続してきた。近年では渋沢敬三らによる民俗学的着目を受け、濱谷浩の写真集「雪国」へと続いてゆく。これらの意味も、民俗のノスタルジアではなく、千年にわたり生存が可能であったゆえの重層的な民俗の蓄積と見ることが出来る。その正体もやはり、独自の水循環系の賜物だったのである。

NPOの誕生

この桑取谷に、ひとつの新たな風が吹いたのは約五年前。NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部という、長い名前のNPOの誕生が始まりである。長引く平成の大不況が、従来の社会システムを崩し、終身雇用の神話も消え去った。人々は、自分で自分を守らざるを得なくなったのである。自己生存の自衛ということが大きく注視され始めたのである。

時を同じくして雪印事件など、食の安全に関わる企業の詐称が暴露されはじめる。

このような時期だったからこそNPO法が出来、NPOの発生が始まったといえるだろう。かみえちご山里ファン倶楽部（以下NPO）も同じ背景による出自を持つ。

当時、県認可第一号となった森林NPOの人々が、村びとと川のゴミ清掃をした小さな協働が始まりであった。その川が桑取川であり、その村びとが桑取の人々であった。ゴミひろいから始まった試みが、現在では常勤スタッフ九名、会員二一五〇名というNPOになった。このNPOは一部の外部知見が誘導してつくられたものではなく、当初から村の人々が主導、参加したNPOである。また、村のことは村で、という上越市の新たな試みが行なわれ、谷の中に新設された上越市営の森林公園や、環境学習施設の運営を当初よりNPOが協働受託した歴史がある。この地域にある市営施設の「地域によるまかない」という試みは、大きな成果を上げる協働事例となってゆく。その協働の成果とは多様であり、ここで多くを記すことはできないが、ひとつだけあげるとすれば、このような実践を通して、市の言う協働と、市民が思う協働には大きな隔たりがあり、今の協働とは「協働幻想」といわざるを得ないという事実の確認が出来たことである。この確認からすべては始まるのだ。互いの誤解を美句でカバーし続ける果ての悲劇は、今それを確認する痛みよりはるかに大きい。そのような厳しい事実の発見も、実践の中で学び取られた貴重な事実である。それら協働の学びの中で、行政は市民へのありかたの再思考を行い、ムラはムラの責任を確認するのであろう。

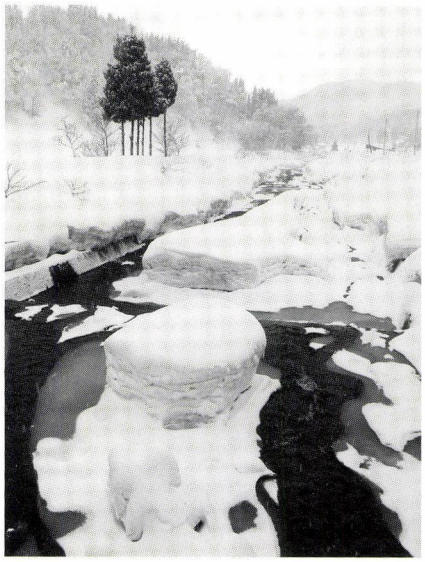
中ノ俣　棚田の学校



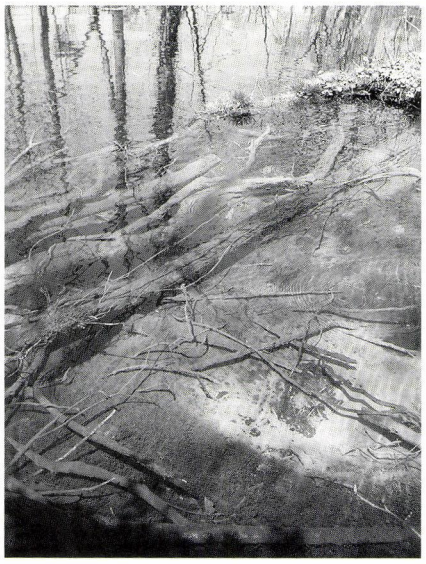
循環する



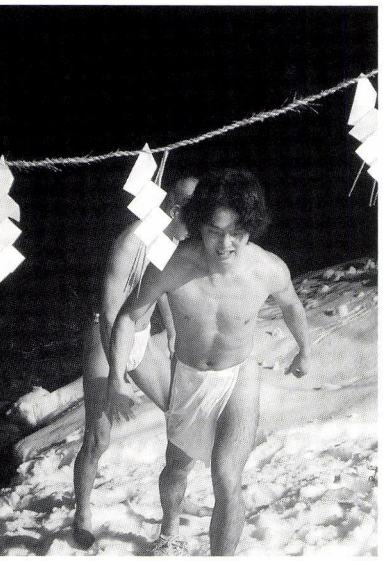
桑取川の源に雪が降る



雪を割って流れる桑取川



くわどり市民の森　材木池
伝説の池からは清冽な水が絶えることなく湧いている



西横山
年ぶりに復活した小正月行事
るような桑取川に入って身を清める若者ち

村落自治の変化

村の自治に関しても、従来の自治会では横のつながりが希薄になりがちであったが、ＮＰＯという組織が谷全体にかぶさる、ゆるやかな傘のような役目をはたし始め、集落のことは自治会で、谷全体のことはＮＰＯで、という自治の二重構造を作り出し、初めて谷全体の関わりが可能な自治機能を手にしたのである。

またスタッフに応募してきた若者たち九名は一名を除いて他県出身者である。札幌、山形、茨城、東京、埼玉、兵庫、広島、長崎、そして直江津出身者がひとり。まるで日本全国からかき集めたような若者たち。この日本の縮図のような若者たちの外来の目が、新鮮に村を捉える姿は、村びとにとってもまた新鮮であったのである。風のような若者が訪れ、土の人々と交わった時、初めて風土がありありとその姿をあらわす。

このようにＮＰＯの果たした役割とは二つに大別できる。まず、ゆるやかで横断的な自治機能の具現化。また外来の目による村の

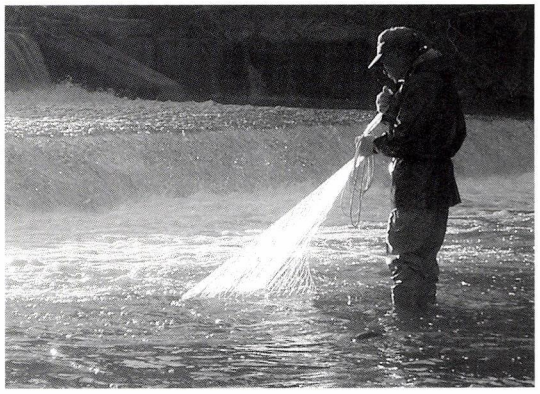
生命

桑取川が夕日の日本海に入って行く



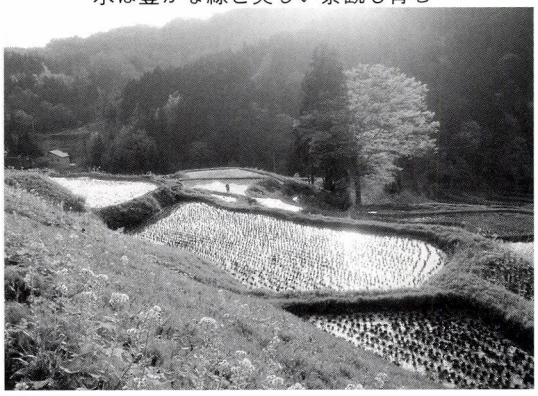


もうもうと水蒸気をあげる冬の日本海
水の大循環だ



桑取川は鮭にとっても母なる川

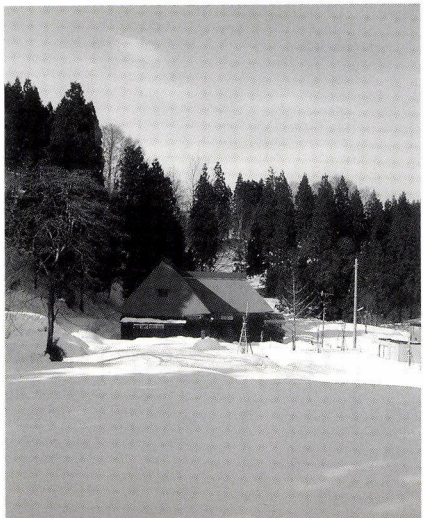
中ノ俣　角間の棚田
水は豊かな緑と美しい景観も育む



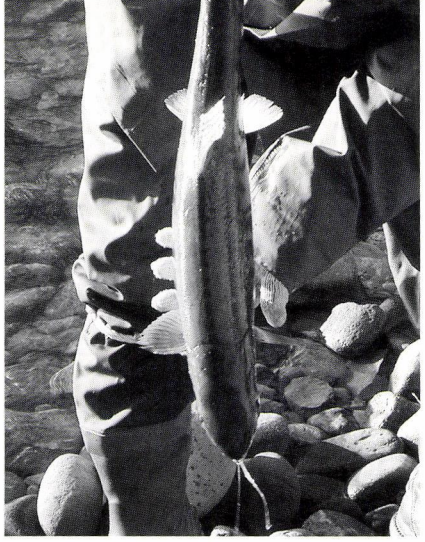


虫追い川舟
40 年ぶりに NPO によって復活
川は祈りの場でもある

様々な資源の再評価である。どの土地においても、地域づくりの基本たる二本柱とはこのようなものではなかろうか。地域資源の発見があり、それを生かす仕組みがあるということだ。簡単なことのようだが、この二つがしっかりするのは大変なことだ。様々な幸運に恵まれて桑取谷でのＮＰＯ活動が始まった。



ＮＰＯ事務所から眺める冬の横畑集落





鮭は海と川の恵

ムラを見る視線

NPOが招請し、幾度も桑取を訪れている吉本哲郎は水俣のひとである。あの水俣病の地獄の中から、今の環境先進都市水俣をつくりあげたひとだ。かれの提唱する地元学とは、じつにシンプルな言葉に収斂される。「愚痴をやめて自治に変えよう」「役所へのないものねだりはもうやめて、ムラの中のあるもの探しから始めよう」このような視線で、ムラがムラの資源を見つけ直さないかぎり、内側からの自治は達成できまい。また、それに大きく寄与するのは、先述のように外来の視線と、地元の視線の共鳴なのである。

また、このような視線は、ムラのもつ美を見つける目でもある。柳宗悦が、その著作で言う美の正体がそれである。柳は言う。

「淡々として波乱のないもの、企みのないもの、邪気のないもの、質素なもの、自然なもの、無心なもの、奢らないもの、誇らないもの、それが美しくなくて何であろうか。譲るもの、質素なもの、飾らないもの、それは当然人間の敬愛を受けてよいのである」(柳宗悦／茶と美より)

このような桑取谷での動きを、外からこられた方が「奇跡」と呼ぶこともある。奇跡とは面映いが、多分どこにでもあることでは無かったのだろうと、振り返った今はそう思う。どこでもできそうで、けれど一番難しいこと。それが村という「人間」の集合と向かい合う活動である。

現在NPO活動は多岐にわたる。その試みはすべて実験であるといってよい。失敗もあるし、むしろ失敗の中から生まれるものがある。若者もその中から学ぶのである。今までは恐れずにやることを。これからは恐れを知りながらやるということを。村びともまた学ぶのである。これからの「村びと」とは多様であること。今住んでいる者だけが村びとではなく、都市に住みながら村に関わる「新たな村びと」の存在。あるいは、やがて住むであろう未来の村びとの存在。未来の村はこのような様々な「新しい概念の村びと」が協力する中で、かたち造られてゆくのであろう。

外来の人もまた村の資源なのである。この内外を越えた「人間」という資源が、村の一番の宝物であることは疑いがない。

クニの萌芽

我々は今、桑取谷を「クニ」と呼び始めた。大層な意味でのクニではない。カタカナのクニである。ただ「クニ」という言葉が表わすものは意味深い。水の大循環。自分たちをまかなえる食物。多様な資源。エネルギー。人間。文化。あるいはその資源フローによって造り出される少量多品目の高い付加価値のある産物。その産物によるほかの「クニ」との交易。共同の経済と、物々交換の経済と、貨幣経済がバランスする場所。

このように「外に開かれながら、内の生存自給と命の保持が出来る場」こそ、ミクロな「クニ」という言葉の意味である。多くの人

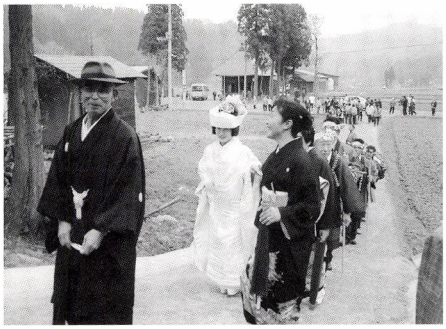


小正月行事の「鳥追い」 西横山
NPOの手で、蓑ぼうしとふかぐつが復活

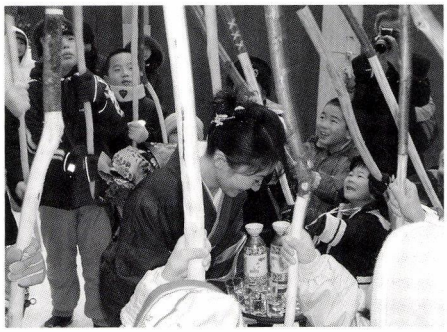




夢にでてくる盆おどり
45年ぶりに復活した提灯の明かりと唄のみの盆踊り 「ものづくり大学」からのインターン生(右写真)も準備を手伝った







山里の嫁入り(結の結婚式)
NPOの女性スタッフの結婚で、45年ぶりに行列が復活 先頭の仲人は中折れ帽と紋付が正装
小正月行事 嫁祝い
祝ってもらうのは昨年結婚したNPOスタッフ(上写真・山形県出身)



そば打ち体験

たちがこの桑取谷にみる夢もまた、このような「クニ」という響きの中にある。広域合併、道州制へと行政密度が希薄になる未来では、各地域が従来の町村区分よりさらにコンパクトな「クニ」として、自前の道と自前のまかないを目指す動きにならざるを得ない。桑取谷の試みが、未来を担っているとするなら、そのような「クニ」の先駆けとして、様々な試みと失敗をつみ重ね、その中から機能するありかたを紡ぎだし、それを同じような過疎の地域にたいして提示してゆくことであろう。

地図に桑取水系を水色に書き込んだものがある。分水嶺に三方を囲まれた桑取谷は、ちいさな出入り口を日本海に面して持っている。谷は奥深く広がり、川は毛細血管のように広がってゆく。そのかたちは卵に見える。あるいは胎に見える。

これから様々な試みが行なわれるであろうクニという卵。ここはこれからの未来に必要な智慧をつくりだす、ゆりかごなのかも知れない。その意味でも、桑取谷とは、やはりひとつの小さな地球なのである。

小川未明と春日山

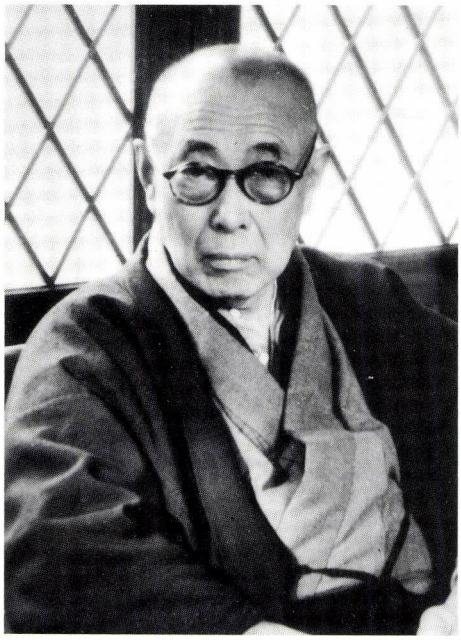
人は夢によって生かされる

小川清隆　春日山神社宮司・植物研究家

●本稿は上越なおえつ信金倶楽部総会における講演を編集部において抄録したものです

はじめに

私の友人S君は、少年時代、カニやアメフラシだとかイソギンチャクというような動物の虜になり、お父さんに願って郷津の海辺の一部屋を借ります。岩の上の小さな動物を捕まえて喜んでいましたが、夜になると、ものすごい波と風の音で一睡も出来ず、翌日しおしおとリヤカーに布団や机を積んで帰りました。でも夢はあきらめられません。今度はオタマジャクシを飼うというようなことを続けていました。将来、動物学者になろうと考えていたかも知れません。



小川未明

しかし彼には家を継ぐという宿命がございました。そして家業を継ぎ、いまや地域の経済界の大御所になっていらっしゃるのは、皆さまご存知のとおりです。

なぜ、このようなことを申し上げるかと言いますと、「人は夢によって生かされる」ということをお話しようと思っているからです。

謙信公の夢

春日山というと、どうしても謙信公の話をしないわけにいきません。以前、花ヶ前さんがお話になったということですから、少しだけさせていただきます。

常勝で戦上手の謙信公の話には、拍手をいただけますが、宗教家だと言うと「そんな謙信があるのか」という顔をして、大体ひんしゅくをかいます。

小林古径記念美術館名誉館長でもある梅原猛先生が『日本の霊性』の取材でお出でになったとき、「謙信公は真言宗ですよ、曹洞宗ではありません」と言うと、「うん、そんなんあたりまえだよ」とおっしゃって、曹洞宗じゃないと頑張っておりました肩の力が急に抜けたような気がいたしました。

さて、謙信公は七歳で林泉寺に預けられます。朝晩、読経を聞きながら暮らしていくうち、お坊様になりたい

という一念になりますが、その年の暮れ父の為景さんが亡くなります。

為景は、あちらでもこちらでも謀反され、一向宗が進入するといっては叩くという、もぐらたたきのような人生に、くたびれ果てて死んでしまいます。

それからは母と病弱な兄と姉の三人、ひっそりと暮らしていましたが、戦が始まり、栃尾で初陣を挙げます。十四歳、今の中学二年生の年で兵隊を指図して戦争に勝ちます。彼は戦の天才だという評判を得て、十九歳で病弱な兄に替わって春日山城主になりました。

この時、朝廷は従五位下の位と、検非違使の弾正少弼という役職を謙信公に与えます。言ってみれば、山梨県知事が長野県の土地を分捕ったので、新潟県知事が行って裁くというような仕事です。彼はそのために、生涯を捧げて戦を繰り返さなければならなくなります。

謙信公は二十四歳の第一回の上洛のとき「ものもうで」に参ると言って、高野山へあがり、清胤阿闍梨に入門を願います。心よく入門をゆるされた謙信としては、どうしても修行に行かなくてはなりません。

帰国してから三年間、悩みに悩み、後のことを密かに手配し、ある日突然、春日山城から一人で抜け出します。負け戦で城を捨てた殿様はたくさんいますが、平和な時代に城を捨てた人は謙信公とお釈迦様くらいのものでしょう。

長尾政景があわてて追っかけてきて「あなたがいなくなったら、国中が乱れて戦国の時代に戻ります」と言われます。現実に大熊朝秀などは謀反しています。謙信はしおしおと春日山へ戻ります。

お坊さんになりたい、しかし国を治めなければならないという使命感の間で悶々の日々を送ります。

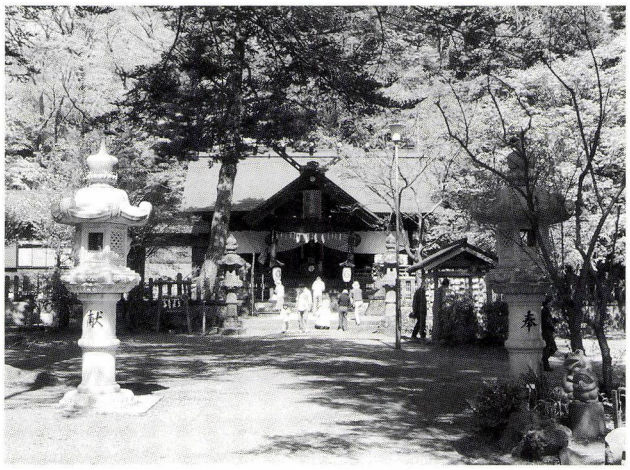
考えに考えた末、謙信公は高野三方の一つ行人になろうと思います。行人といのは雑務・雑役をする人ですが、たとえば根来寺なら、根来塗りを売る。紀州の先から船を出して種子島から鉄砲を持って来る。僧兵といわれて戦争もする。そういう行人になるというのです。

謙信公のかぶりものが行人包みで、弁慶が被っているのは袈裟です。現在、敦賀の神宮寺で、お水送りの行事をやるとき被っているのが行人包みです。謙信公の場合は黒の胴服に行人包みですが、ちょうど、あのような姿だったろうと思います。

行人になった謙信公は、城攻めで何十日も、時には何ヶ月も周りを取り囲んでいると、その間、時間がありますから、陣中にも仏具を持って行って修行をしています。そして四十七歳で阿闍梨権大僧頭という真言宗の最高の位をもらいます。



謙信の夢が叶った？
高野山奥の院への参道にある上杉謙信・景勝廟（国指定文化財）



春日山神社
父澄晴の春日山神社の創建で、健作(未明)少年は高田中学まで八里の道を通学することになる

謙信公も夢を捨てず、最後まで戦人(いくさびと)として戦いながら、自分の願いを叶えていったのだと思います。

未明の夢

小川未明先生は一人っ子で、家を離れたため跡継ぎがいなくなりました。お父さんは、あちこち廻って婿を探し、八番目に話を持ち込まれたのが私の親父です。父は神主の娘の子供で、跡を継ぐことについては平気だったのだろうと思いまが、その頃は結婚して他家の養子になっていました。しかし、夫婦で小川家へ入籍してしまい、小川未明先生の義弟になります。

私にも覚えがありますが、未明先生のお母さんは非常に迷信深い人で、写真は影が薄くなるといって撮らない。出征兵士の履物は、片足は家の方へもう片方は外へ向けて置く、外向きに揃えると死んで帰ると言って怒る。日食は太陽さんが病気なのだから、煤ガラスで直接見るとばちが当るので、池に映る太陽を見なさいと言う。

このような迷信が、いかに大事かということが、後で出てくるわけですが、もろもろの迷信の中で生きているような人でした。

未明先生は五、六歳で漢学塾へ行き、それから小学校へ入ります。大変な腕白ぼうずでしたが、卒業式では答辞を読むという一面もありました。しかし算数が出来ません。たぶん1＋1が2では面白くない、2になったり3になるなら面白いけれど、答えが決まっているような算数なんて面白くもない、ということだろうと思います。高田中学校では、二年生の時に相馬御風先生が入ってきます。すぐ、二人は将来は文学者になると、お互いを認め合います。

三年生になるまでは正常な関係でしたが、翌年、未明先生は相馬先生と同級生になってしまいます。さらに一年早く相馬先生は卒業してしまいます。未明先生も何とか四年生になりますが、卒業試験で数学が出来ない。もう一年やらなければならないと思ったときカンニングをし、見つかって追放されます。

落第に、お母さんは学校に対して腹を立てます。

「健作（未明の本名）や、お赤飯を炊いてお祝いをしてあげよう」

そう言って、お釜の上にどんと二段重ねの大きな蒸篭を乗せて赤飯を作り、重箱に詰めて背負って春日山から降りて行きます。今の幸町には未明さんを育ててくれた蝋燭屋さんや、おばあさんの実家が本町三丁目の梶川はんこ屋さんですが、まだほかにも親戚があります。「健作おまえも背負え」なんて、背負わされたかもしれませ

ん。

「あら、小川さんの奥様、これは何のお祝いですか」

「健作が中学校を落第いたしましたので、お目出度いと思いまして、お赤飯をお炊きいたしました」

聞いている人には、お母さんの腹の中の抑えがたい憤懣は、とても理解出来ないのです。

こうして未明先生は「小説家になるんだ」という思いだけで上京して行きます。

捨てる神あれば助ける神ありで、行く先をちゃんと教えてくれる人がいました。英語の喜安璡太郎先生が「お前の英語は素晴しい、おれも東京専門学校（後の早稲田大学）を出た。だからおまえも入れ」と言って送り出してくれました。落第坊主の未明先生が、なぜ英語だけ良かったのかと言いますと、五歳から漢学をやっており、「我は・なり・少年」と「アイ・アム・ア・ボーイ」は単語の並べ方が同じなので、それで英語だけは良かったのだと思います。面白いことに次女の岡上鈴江さんは翻訳家です。遺伝的なことを感じますけれども、本当に上手だったのだろうと思います。

入学してみると、同級生に相馬御風がちゃんといました。彼は京都の高等学校を落第し、東京専門学校へ入り直してきたのです。

未明先生は坪内逍遥から「未明」―びめい―という号をもらい、いよいよ小説家としての夢が現実として開けて行くことになります。

ちなみに相馬先生は、歌人で文筆家でもありました川合直次高田市長と仲が良く、おそらく、その吟風の号をまねて御風にしたのではないかと思います。

今「びめい」と発音する人はおりません。人の良い未明さんは、「みめい」さんと呼ばれて、はいはいと返事をしているうちに、皆「みめい」だと思うようになってしまったのだろうと思います。



小川未明生誕の地
題字は坪田譲治　上越市幸町

未明先生は、出雲から上京して早稲田の教授になったラフカディオ・ハーンに出会います。この小泉八雲との出会いが、その後の童話、あるいは小説の創作に影響を受けていると思われます。こういうことは最近まで誰も言いませんでしたが、間違いなくハーンの影響があると思います。

ハーンは松江師範学校教師として赴任し、節子と結婚します。早稲田へ来て、わずか四ヶ月後に亡くなりますが、未明先生の卒論は「ラフカディオ・ハーンを論ず」です。また、未明先生が小説を発表して認められた「早稲田学報」に、二回ほどハーンを書いています。「ラフカディオ・ハーンはおれに任せておけ」というような気持があったのだと思います。

ハーンはイギリス人ですが、アイルランドの出身です。

お父さんは軍医で、赴任先のギリシャの女性と結婚しますが離婚し、ハーンはアイルランドのおばさんに育てられます。

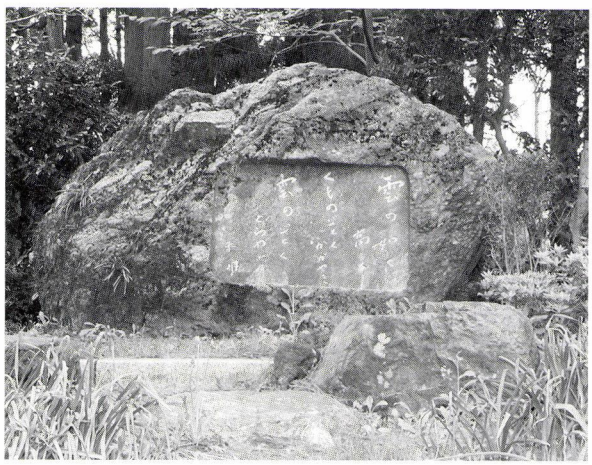
アイルランドは不毛の土地で、石だらけの大地しかありません。海から海藻を拾ってきては石の上へ並べ少しずつ土壌を作っていきます。ようやく穫れた麦は本島の地主がみんな持って行くので、彼らは畑のすみに作ったジャガイモで暮らしています。

本島からキリスト教の布教に来ますが、あまりの過酷さに、みんな逃げ出してしまうほどでした。そのためアイルランドには、昔からの土俗の言い伝えや伝説が数多く残っていて、今でも「ほらそこを見てごらん、カマドの上に小人がいるよ」というようなことが平然と語られるような国です。

そのようなアイルランドで育ったハーンが出雲へ来ます。出雲も言い伝えや伝説が満ち満ちている国です。ハーンの奥さんは、日本のどろどろした、いろんな妖怪的な物語を語ってくれました。そこで彼は「耳なし芳一」や「妖怪」という本を書くことになります。

一方、春日山城は、たくさんの侍たちの恨みもあれば血も流れています。謙信公が亡くなった後、本丸の庭石がぶつかり合って戦を始め、何か不吉なことが起きるのではないかと思っていると、やがて景勝さんが本丸に入って北条三郎（上杉三郎景虎）の屋敷へ鉄砲を撃ちかける。この「御館の乱」では、私の住んでいるすぐそこまで兵火がおよび、掘り起こすと今でも灰が出てきます。

春日山城には、上杉家に替わって堀家が入りますが、あるとき堀家の侍が城内を歩いていると、鎧武者が二〜三〇人ぞろぞろ出てきました。「そなたたちはどこの手の者か」と聞くと「我らは上杉家の者である」と答えます。そんなはずはない、さてはものけと刀を抜くと、すっと消えてしまったとか、雨がしとしと降る日、頂上の井戸を覗くと金の鞍が浮いているとか……。そのような伝説に満ち満ちた春日山、そこで迷信深い両親に育てられた未明先生が、ラフカディオ・ハーンに出会って、深い感銘を受けたのに違いありません。



「雲の如く…」の未明の詩碑
春日山神社境内

未明先生の童話を思い出してください。悪い言い方ですが、未明童話はすべて妖怪伝です。例えば「赤いろうそくと人魚」、あれはこの世に存在しない人魚です。「月夜とめがね」、指に怪我をしたと入ってきた少女を、買ったばかりのめがねで見たらチョウチョウだった。そして「牛女」。どれもみんな妖怪伝と言えそうです。

未明先生は、栄養不良で抵抗力がなくなった長女と長男を病気で死なせていますが、「金の輪」の二人の少年に、なにか霊魂的なものを感じてお書きになっています。

最後に「雪で作ったお母さん」というお話を紹介しましょう。

ある町に母と子が住んでいました。息子は人形師の修行に町を出、残ったお母さんは行方不明になります。

ある真冬の寒い日、一人の旅人が駅へ降りて旅館を探しますが、寂しい町があるだけです。そこへ「宿をお探しですか」と声をかけてきた雪のように真っ白い女の案内で、旅館に泊まることができました。翌朝、昨夜の女のことを聞くと、「ずっと前に行方不明になった人です。先日、人形師の修行に出ていた息子が帰って来て、母が行方不明であること知って、泣いて戻って行ったばかりだそうです。もう少し早く帰っていれば息子に会えたものを」という答えが返ってきました。昨夜の礼を言うため女の親戚を訪ねますが、行方不明になって以来、帰っていないということです。そのとき外を見ると、昨夜会った女とそっくりの雪の人形が立っています。少年が母さんが恋しいと作っていったものでした。

話はそこで終わっていますが、まさに妖怪です。世に言う雪女は冷たくて非情で、息を吹きかけて人を殺しますが、未明先生の雪女は、旅人を宿に案内してくれる暖かい雪女です。



春日山神社創立者　小川澄晴千代之霊碑　春日山神社境内

故山長しへに父母を埋めて
我が詩魂日本海の波とならん
未明

未明先生には落第した苦しい思い出がありますから帰るべき故郷はありませんでした。御風先生には帰るべき故郷がありました。郷土のために尽くしましたことは、よく知られていますが、未明先生の場合は「あれが落第坊主の未明だよ」という思いが最後まであったと思います。先生はひっそりとわが家へまいりまして風景を眺め、お父さんお母さんに会って帰る。それが未明先生の故郷での様子でした。

今日は、「人は夢によって生かされる」というお話をさせていただきました。ありがとうございました。

＊高野山無量光院清胤　真言宗の奥義を謙信に授ける。国分寺再興には導師として招かれている。

＊高野三方　真言宗高野山における学業中心の学侶方、俗務を行う行人方、諸国を勧進する聖方を言う。

＊川合直次　明治七年、直江津の回船問屋・材木商に生まれる。大正十三年高田市長に就任、以後十一年間、高田の近代都市化に尽くす。昭和十三年死去。

小川未明文学館

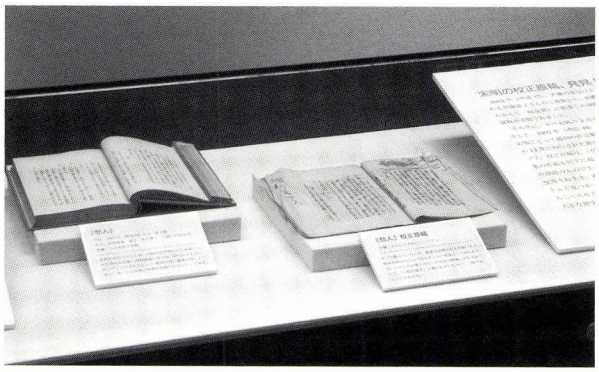
上越市本城町（高田図書館内）
電話　025－523－1083
開館　火～金曜　10～20時（10月～翌年5月は19時まで）
　　土・日・祝　10～18時
休館　月曜
入館　無料

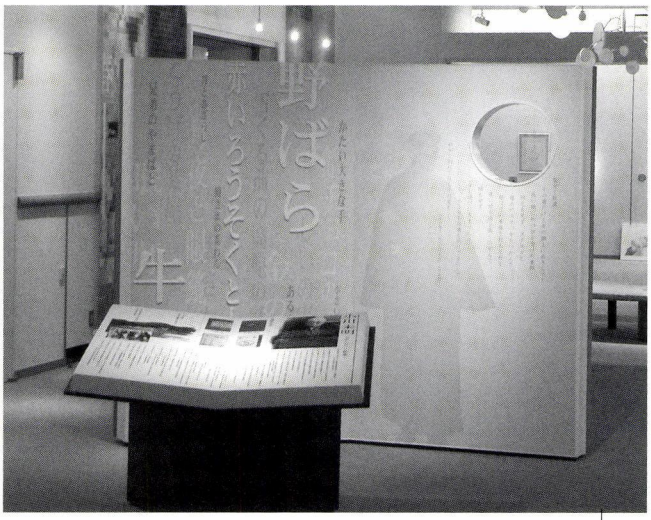
小川未明は、日本のアンデルセン、童話の父と呼ばれ、記念館開設は待望久しいものがあった。昨年十月のオープン以来すでに二万人もの来館者があったという。

未明は、明治十五年、旧高田藩士で、上杉謙信を崇拝し自ら神職となって春日山神社を創設した小川清澄の子として生まれる。

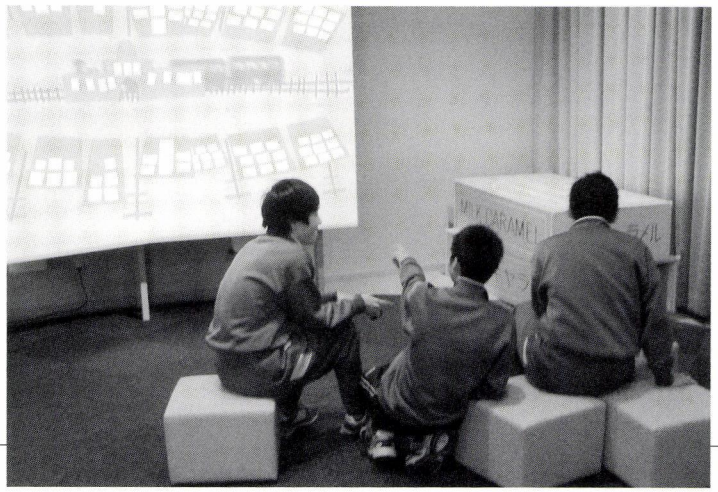
児童文学者としては初めて芸術院会員に選ばれ、文化功労賞を受ける。昭和三六年没、享年七九歳。

館内のスペースは小さいがコンパクトに未明の生涯と作品の背景が分かるように展示されている。自筆の原稿（複製）で未明文学に触れることができるのも興味深い。









この人に学べ



有徳の人
山田辰治

新田の開発

頸城区には、大きな門と高い塀を巡らした豪農の屋敷が向かい合って建つ通りがある。その一つが、山田辰治を生んだ山田家である。

由緒書によれば、山田家は近江国大津城主京極高次の老臣として二千石を与えられていた。京極家は関ケ原の合戦後、小浜城主となったが、なぜか山田家は主家を離れて信濃に移り、二十年を過ごしている。

山田家では百間町（頸城区）に定住する治左衛門を初代としているが、寛永十三年（一六三六）ころから、越後高田藩の松平光長は、頸城の新田開発を盛んに行っており、それを聞きつけた治左衛門は信濃から移住し、以来、新田開発事業に努めて山田家の基を築くことになる。

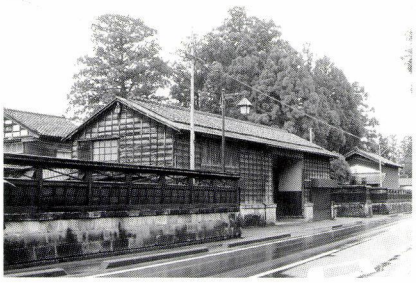
この初代治左衛門から数えて十一代目が山田辰治である。

家風

山田家では、宝暦年間に至って酒造業を始め、家産を増大させていったが、その財力で高田藩榊原家の窮乏した財政を率先して助け、藩から苗字帯刀を許されたが、それを誇ることもなく、また大肝煎や庄屋などの村役人を命じられても固く辞して受けることがなかった。それは山田家の家風として受け継がれ、一切の公職に就くことはなかった。

しかし、その一方で風雅を愛し、文人墨客





向かって左が山田邸　右は瀧本邸

と交わって、多くの文化人の支援も行っている。

生立ち

このような家風を持った山田家の当主となる辰治は、明治元年一月、十代又治の長男として生まれた（軽便を起こした大竹謙治は末弟）。

七歳で百間町校に入学、その後、山田家の招きで開かれた温故知新塾（温知塾）で井部健斎について漢詩と書を学び、愛山と号した。この塾には、同年で辰治と終生の友となる増村度次（朴斎）も針村（板倉区）から学びに来ていた。

父又治が四九歳で亡くなり、辰治は十三歳で家督を継ぐことになったが、叔父の山田習治が後見人となった。

習治は学問もあり、温知塾創立の功労者で、自らも梅村と号して俳句をよくし、絵筆は倉石乾山に学んでいる。

明治十八年、叔父と健斎の勧めで、南摩羽峯はじめ学者・知人への紹介状を携え上京した。上京後は東京専修学校の聴講生として学びながら、南摩羽峯・中村敬宇の私塾で漢学・史学を学び、さらには陸軍乗馬学校に入学して乗馬の訓練を受けている。

帰郷後、自ら馬を飼育して稽古に励み、二頭の愛馬は日露戦争に応召し、無事に帰還したというエピソードもある。

明治十八年の上京には、増村度次も一緒であった。途中、二人は碓氷峠の宿で一夜将来について語り合うことがあった。

度次は大衆の教育水準の向上を目標に掲げて、中等教育の実践を説き、辰治は専ら、専門教育を充実させて国家有為の人材を養成すべきと、互いに主張しあった。

この二人の「教育論」は、度次の有恒学舎（県立有恒高校）の創設へ、辰治の育英事業での人材養成へと展開して行くことになる。

育英事業

辰治の育英事業は明治二九年、奨学資金規定を設けて始まった。昭和十九年に終了するまで、その恩恵を受けた者は二百数十名におよび、学者・軍人・実業家・医師など、大正から昭和に中央で活躍した人材を排出している。

奨学金は必ずしも村内に限定することはなく、上越地区の多くの俊才がこの恩恵に浴することになった。

ブラジル総領事になった中島清一郎、東京大学名誉教授インド哲学者宮本正尊や辰治の弟大竹謙治なども育てている。

社会事業

明治二八年、辰治は至善会と称する慈善組織を創設した。

会員は小作米五石以上を納める者に与えられる資格であったが、養老・育児・兵役・廃疾・死亡・火災などに、山田家から一定の資



山田家の庭園
村民に現金収入を得させるために造園した

金を援助するものであった。

七十歳以上の者へ敬老金として毎年二円ずつ、多子の家、出征兵士の家などにも毎年援助を行っている。

また、備荒米貯金という米の貯蓄制度を設け、凶作の年には備荒米の払い戻しや同額の無利子貸付けもおこなった。

百間町に郵便局を開局するに当たり、学童全員に一円ずつの郵便貯金通帳を作って与えた。学校ではその通帳を預かり、修学旅行の基金に当てた。

これは百間町局を集配局にするための、辰治の策であったが、「子どもたちが貯蓄することを心掛けてくれればよい」といって、毎年、新入児童に対して続けられた。

地域振興

明治四三年軽便鉄道法が施行され、全国各地で私営鉄道が建設されていった。

これに着目した辰治と大竹謙治は、有志と協力して頸城鉄道の建設を計画し、大正三年十月一日、新黒井・下保倉間、翌年浦川原までの十五キロが開通した。

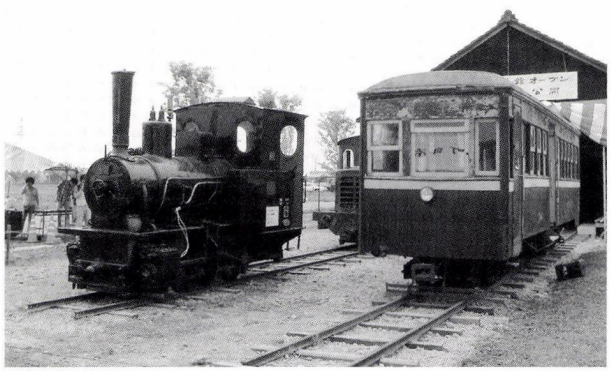
これは単なる交通機関の開設ということだけではなく、東頸城地方の産業振興・文化振興を図った社会開発的な考えで計画されたものである。「軽便」は、今日の頸城自動車として、バス路線へと発展していくことになった。

頸城鉄道は大竹謙治を社長とし、辰治は相談役として表に立つことは無かったが、今も頸城自動車では「功労者」として、その徳を称えている。

愛山山田辰治は、生涯にわたって社会奉仕・文化事業に尽しながらも、社会的栄誉には全く無縁の人であった。まさに有徳の人というべきである。

昭和三三年二月三日、九十歳で天寿を全うした。

本稿は、久保田好郎元上越市史編纂室長が他誌に発表したものを了解を得て、編集部において『じょうえつ市の郷土史散歩』・『新潟県人物百年史・頸城編』・『頸城の足として90年』（頸城自動車㈱90周年記念誌）・『頸城村史』等を参考に再構成したものである。
写真提供・山田辰治（頸城自動車）／山田家庭園（久保田好郎）



くびきお宝をのこす会で保存されている
軽便を走ったSL「コツペル」

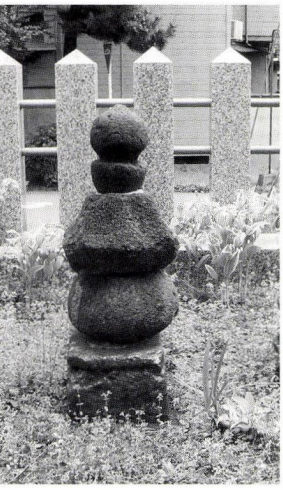
カメラの眼

日宮神社の人たち

「歴史の風景」



まちの歴史を伝える日宮神社　（中央５丁目）



能登島から贈られた五輪塔



塩浜町（直江津地区では、祇園祭で屋台を出す町名を自治会の単位としている）は、江戸時代には塩屋新田村、明治以降直江津町塩屋区として地域の歴史を刻んできた。

このまちを作った人たちは、能登から移住して来たと伝えられ、鎮守の日宮神社の石碑にも、慶長十九年「能登国鹿島郡嶋之地邨小浦」から移住、塩焼きを生業としてきたとある。

しかし、なぜこの地に移住して来たのか、詳しい事情は伝えられていない。

天正年間に上杉景勝に臣従した当摩善三郎という人物の手引きで、揚浜式塩田技術者として移住。あるいは前田利家の石動山焼き討ちに際し、石動山側に付いた能登島小浦の人々が、上杉景勝を頼って落ち延びた。など諸説がある。

『直江津町史』には、年々塩炊きに来ていた人たちが慶長十三年頃定住して立村、慶長十九年に小浦の村民十戸ほどが移住したと伝えている。また、高田藩松平忠輝の代に能登石動から移住して製塩を業とし、日宮神社は石動権現を勧請したという文書も残っている。

一方で、故地とされる能登島（能登島町・現七尾市）小浦には数々の伝承がある。

「能登名跡誌」に「この村（加賀藩への）年貢未進して一村舟にて転退せし也」とあり、実際、無住になった小浦は、江戸時代は隣の野崎村の持添になり村役人も兼帯している。しかし、その時期については慶長十年（一六〇五）あるいは寛永年間（一六二四～一六四三）と、はっきりしない。逃散の手引きをしたのが先の当摩善三郎だという説もある。

＊中央五丁目は浜町（名古区）も含まれる



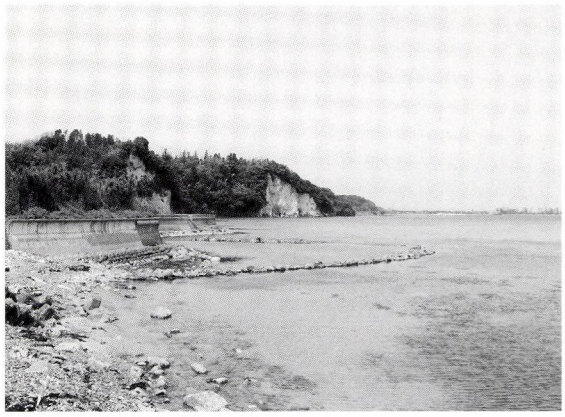
佐幸屋敷への案内板



人工的に削られた跡や五輪塔が置かれている屋敷跡



佐幸屋敷全景
手前は奥深い谷地田になっている



村人が船を漕ぎ出した小浦の海岸



説明板には寄贈した五輪塔のことも書かれている



野崎のバス停
松島という海水浴場がある



この移住について、小浦に一つの物語が伝えられている。

物語の地、小浦左幸屋敷跡には井戸跡や五輪塔が出土し、史跡として保存されているが、話は「銭掛松」といい、屋敷の住人、森（小浦）左幸は、小判を庭の松に吊るして土用の虫干しをするほどの大金持ちであったが、小作には重い年貢を課し、耐えかねた人たちは、村をあげて越後へ逃げてしまった。一人残された左幸は「小浦の左幸も一人おられん」と、後を追って越後へ渡ったというものである。

その時のことなのか、足手まといになる子どもを殺して埋めた場所もあるという。

明治二二年に至って、青山市郎兵衛は父祖の地への懐旧の情に駆られ小浦を訪問。神官や光顕寺（無住地になったため野崎村に移転したと伝えられている）の住職に、村の由来などを尋ねて帰り、同二七年、塩屋新田の由緒を刻んだ碑を日宮神社境内に建てた。

昭和四六年、能登島から来賓を招き、塩屋新田村開村三五〇年祭を開催、その折、左幸屋敷跡の五輪塔が寄贈されて、以来、両地区の交流が始まり、佐幸屋敷跡で祖先の供養祭も行われた。

小浦から百十数キロ、その海路をどのような思いで人々は渡ったのであろうか。

参考・日本歴史地名体系　平凡社／日本地名大辞典　角川書店／直江津町史／上越市史　別編3　寺社資料一

協力・青山直栄

建物さんぽ

その二　山の辺に辛夷咲く

昨年暮れ、雪が降り始めた日、ゑしんの里記念館に赴く。「和ごころの調べ」と題する平家琵琶・和太鼓・三味線のジャムセッション。こちらも、それに呼応してキモノと角巻。朝からの急な降りように除雪も追いつかず、ゴム長履きは正解だった。エントランスにたどり着いて、草履に履き替える。

天井の高い多目的ホールは既に満席に近いが、上品で鷹揚な雰囲気は、公共建築のせちがらさが微塵もない。ロビーもトイレもゆったり。大きな窓から自然の色だけが広がるここは、市内の公共建物で最もキモノ姿が似合う所と言えそうだ。

いよいよ演奏が始まる。弱冠二六、荒尾努の奏でる平家琵琶の音は、降りしきる雪に包まれたゑしんの里に、那須与一が射た扇がひらりひらりと舞うようだ。

昨夏開館したゑしんの里記念館は、のどかな山辺の田園に、ひっそりと咲く恵信の愛した辛夷（こぶし）の花。テーマカラーの躑躅色に一筆描きの辛夷の花が清楚に浮かび上がる。

設計の池原義郎は、ずっと気になる建築家であった。学生時代、ディテール（建築的詳細）の巨匠の詳細図面と実物を眺めては、ため息をもらした日々を想い出す。

鉄骨や鉄筋コンクリートに、指物師レベルの技量を要求、それに応える各職能の自負がそこかしこに潜む。

究極の施工精度を要するギリギリの水面とガラス張りの壁面が反映して一体となり、自然の光をキラキラと採り込む。屋根の膨らみは、低い山並のシルエット。恵信のやさしさをも思わせる。

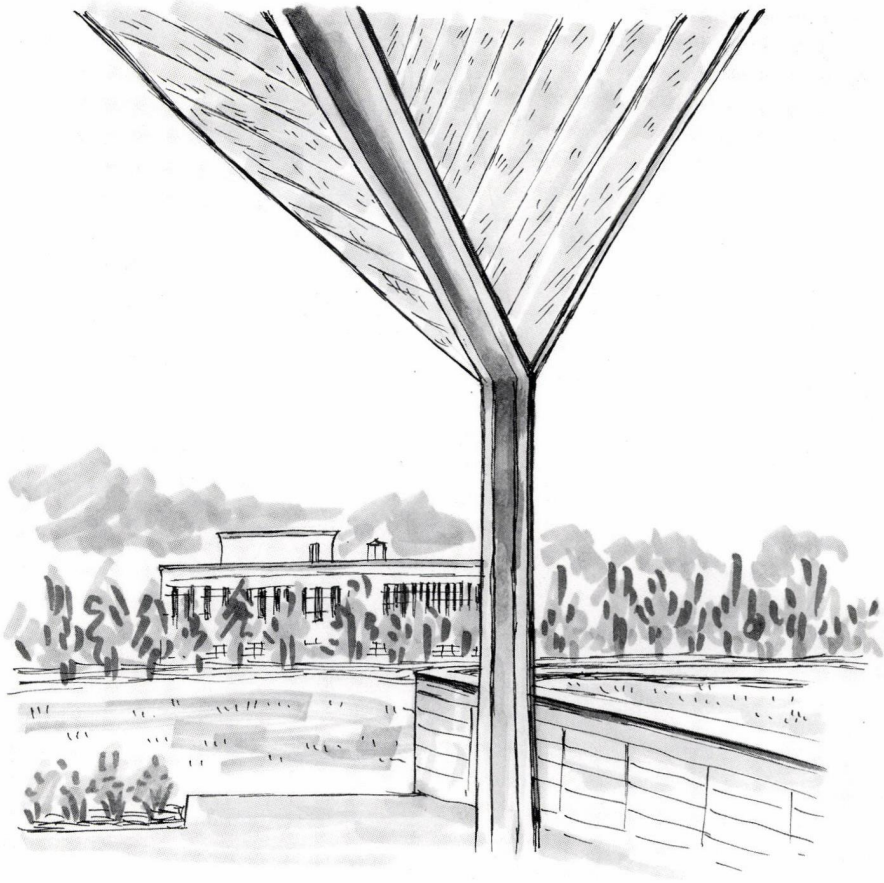
鋭角三角形のとんがりキャノピー（片持ち庇）の先は、変哲もない変電所を指す矢印のようでもある。水田の緑に浮かぶ、その白い壁と細長窓のバランスが妙に美しく見えた。

同じ設計者の浅蔵五十吉美術館（石川県能美市・九谷陶芸村）と共通するものもあるが、ゑしんの里は、表情がもっと柔らかい。

三味線、助六太鼓と続く演奏に、ひととき寒さを忘れて酔う。そして、普段は眠り顔の建物に表情が満ちていく。ひとりひとりの喜びや華やぎに満たされることで建物が完成していくようだ。結局、「建物がどのように愛され、生かされるか」ということが、建物の値打を決めるのであろうか……。

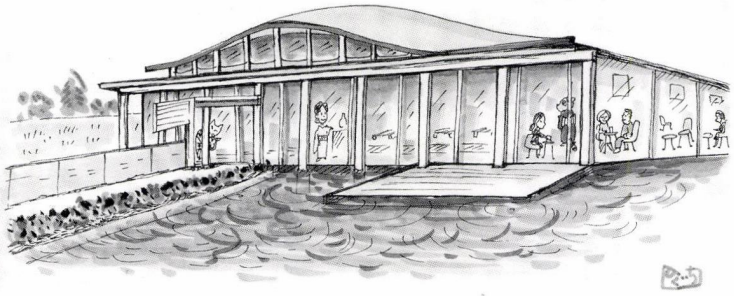
帰り際、水面に浮かぶ月見台に雪がしんしんと降り積もって、真っ白い方墳になっていた。

この冬の雪は、その日からずっと降り続いた。

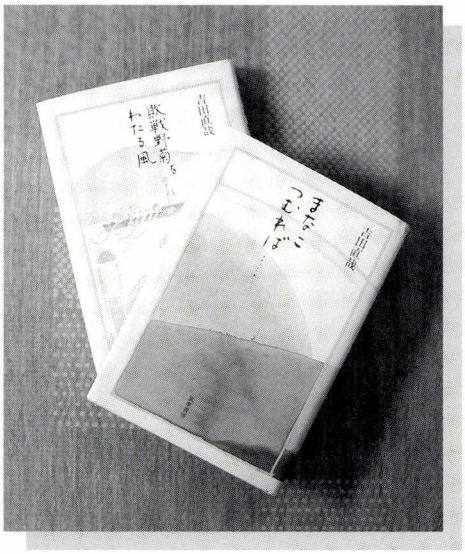


文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

ゑしんの里記念館
上越市板倉区の恵信尼廟に隣接
入館無料・月曜休
午前九時～午後九時・軽食あり
電話　〇二五五－八一－四五四一



■読書びと



まなこつむれば……
敗戦野菊をわたる風

吉田直哉著

共に筑摩書房刊
一九〇〇円(税別)

倒れた父親が撮りためた八ミリフィルムを、病中の慰めにとDVDにおこして都度の思い出を話しながら一緒に見ている。液晶の画面に揺らぐモノクロの昭和三十年代の直江津の風景。

ミレニアムの前後も、そして昨年敗戦六十年の節目を迎えた年も、NHKは回顧の番組を繰り返し放送した。

加古隆作曲のリリカルなテーマ曲を背景に綴るNHKのドキュメンタリー〈映像の世紀〉。動く映像を手に入れた人類が、科学技術を駆使して瞬く間に完成させたこの記録のシステムにより、虐殺と難民の血と涙に塗りこめられた百年の歴史が描き出される。深夜、有名無名の人物が証言する時代の断面に出会いながら、それらと千里を隔て、八ミリに映し出される人々の、一様に笑みを絶やさずに海辺や祭りの人混みの中を歩いている姿を脳裏に対峙させていた。

私たちにとって、そして『直江の津』にとって、この海辺の町の、戦争とその前後の暮らしの何を記憶し、語り遺さなければならぬのか。

吉田直哉(よしだなおや)のエッセイ集『まなこつむれば……』(二〇〇〇年・筑摩書房)は、食道癌の手術後、多臓器障害で死の淵に立ち、与えられた本来の天の時はすぎ〈中有〉に身をおいている、と想い定めた吉田が世に贈った鎮魂の一冊である。

「思ってもみなかったのは、生き長らえると敬愛する人びとを送る側になる」と感ずる吉田の前を足早に旅立っていく友人、先達。

武満徹、草野心平、司馬遼太郎、山本七平、そして『戦艦大和ノ最後』の著者吉田満…。

巻頭に並ぶ彼らを偲ぶ言葉は、まなこつむって思い直す、まなこつむれば見える、まなこひらいて読み直す、と様々に結ばれる。『花嫁の父』ほかの身辺雑記や映像論を挟み、掉尾の〈レクイエム〉の章では再び悲しみの挽(ひ)き歌で、遠ざかる姿を見送る見事な構成となっている。

吉田直哉は、一九三一年に東京に生まれる。東京大学文学部哲学科卒業。五三年NHK入局後はディレクターとして、「日本の素顔」「未来への遺産」「太閤記」「源義経」など、ドキュメンタリー、ドラマの両分野で多くの斬新な番組を演出した。九〇年からはわが国で初めて創設された武蔵野美術大学映像学科の初代主任教授として、デジタル・ハイビジョンの開発と導入を視野に講筵を開き後進を育て上げる。

吉田の『敗戦野菊をわたる風』は『まなこつむれば……』と同じく安野光雅の装丁に飾られ、二〇〇一年に筑摩書房より上梓された。五三篇の掌編は、「私が死ぬと、私のなかで私と共に生きてきた何人もの、すでに死んでいる人びとがもういちど死ぬ。(中略)たくさんの、すでに失われた風景も永遠に消えてしまうのだ。」と書き下ろされた。時代の大きなうねりの中で、家族や友人との日々の記憶こそが個々人の真の〈歴史〉であり、脳内に結ばれた映像が世界の全てに通ずる回路なのだ。

四歳まですごした家の記憶からはじまり、NHK採用の報告を、『なよたけ』の劇作家で一年後に自裁する加藤道夫にするところで中仕切りとなる。転校によって生死の分かれた、爆心地浦上天主堂近くの小学校同級生の面影、吉田肉腫の癌研究で識られる父、吉田富三が語る生への畏敬、『まなこ…』に熱く語られる夭折の天才画家松長幹太(まつちょうみきた)との出逢い。人生とは思い出の集積であるという吉田の述懐が胸を打ち、ドキュメンタリーで日本と世界の現実を、またドラマで虚構の人間模様を映像化するにあたって、何と闘い何を守りぬいたか、の原点が語られる。

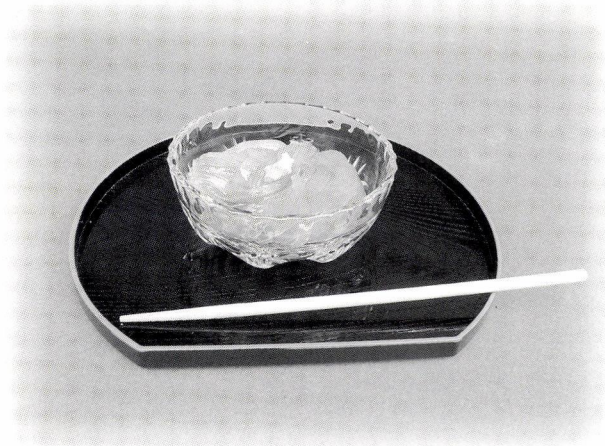
テレビ創成期から同伴し、山田太一や向田邦子のシナリオを書架に並べる私は、このメディアが〈敗戦野菊〉のように、時代の焼け跡を蔽い尽くす人の想いを萌やすと見据えたい。(針)

食

ところてん

「ところてん」は海よりも、山中の滝などを眺めながら食すため、山の産物と思っている人も多い。

西の方では、酢醤油・辛子ではなく黒蜜で食べるそうだ。那谷寺門前の茶店は酢醤油だが、西に配慮して黒蜜もある。このあたりが分岐点かもしれない。



五智国分寺名物　からし酢醤油と一本箸が定番

祭

八坂神社の祇園祭は、上越市になってから、隣まちの直江津から高田へ神輿が出向いて祭りを行う意味があまり分からなくなってしまった。高田開府以来の直江津地区との歴史を知る上で、屋台会館の存続と充実を望みたい。

六月三十日　北城神明宮　夏越の祓い　茅の輪くぐり　北城町
七月　七～十四日　江野神社　祇園祭　名立区
十七・十八日　関山神社夏祭り　仮山伏演舞　妙高市
二十日　風巻神社　大祭　百五十段の急階段を神輿が勇壮に下る　三和区
十六・十七日　謙信公祭　川中島合戦などが再現される　春日山神社
十九・二十日　居多神社講社祭
二十・二一日　春日新田祇園祭　春日神社
二三～二九日　八坂神社　祇園祭





上越産業振興研究所レポート

わさび栽培への挑戦

地方都市の課題と研究所

先般、「子供の日」にちなんで政府が発表した人口推計によりますと、四月一日現在の子供（十五歳未満）の数は去年より十八万人少なくなり、これで二十五年連続で減りました。日本は今や世界ナンバーワンのスピードで少子高齢化が進んでいます。

少子高齢化の進む中で、地方都市は自助・自立を迫られ厳しい時代を迎えています。合併を経た上越市が置かれている状況もまた例外ではありません。上越市と合併した周辺の全十三区の総合事務所を回った印象では、市の人口が全体で流出しているだけではなく、市域内での人口の移動が起きていることも感じられました。家を建て替えするときは、より住みやすい所に躊躇なく出て行ってしまう人が多くなったといいます。

今多くの地方都市が、リタイアの時を迎えようとしている「団塊の世代」を呼び込もうと、様々な仕掛けをアピールしています。人口減少時代の中で地域間での人の争奪戦が始まっています。このことに鈍麻なまちは坂道を転がり落ちるしかありません。知恵も出さず何もしなければそれは必然の道です。

この衰退の坂道を平らに戻すことができるものは産業です。産業振興こそ歯止めとなる第一のエンジンですが、そのために研究所が当面の課題としたのが「ミニ事業の立ち上げ」です。地域に新しい産業のタネを撒こうという挑戦を始めました。

わさびとの出会い

ミニ事業の起業のタネとして追いかけた幾つかの材料の中で、今そこそこ形になろうとしているのが、わさびです。

平野部とは違い、農業の大規模化ができない中山間地の耕作放棄地を減らすために何かないかと考えていたとき、何気なく見ていた農業新聞の市況欄に、二キロで一万五千円から五万円もする野菜が目に止まり、体のどこかがグラっと揺れました。震源地はわさびでした。

好奇心の趣くままわさびの勉強を始めたら今度はわさび栽培に関する特許を取得した岐阜県のベンチャー企業が新井（現妙高市）に支店を開設したというニュースが新聞に載りました。早速岐阜本社に連絡し社長に面談を申し入れ話を聞きました。十分な手応えがあり本気で勉強する価値があると思いました。

なぜ今わさびなのか

わさびは、学名Wasabia Japonica（ワサビア・ジャポニカ）という日本固有種の野菜ですが、知れば知るほど懐の深いデリケートな植物であることが分かってきました。

静岡、長野などの山間部の、清冽な湧き水のある所で栽培されています。ミネラル豊富な湧き水（もしくは井戸水）でしか育ちません。しかも、鉄分が〇・三ＰＰＭを超えてはならず、水温は七度から



中央の広く造成された部分が予定地

十三度くらいがお望みで十八度以上になると育ちません。まるで中世の王族の麗しき美姫のようにわがままです。兎にも角にもわさびは水が命なのです。

気高いわさびの持つ第一の偉大な効用は、辛味成分のイソチアシアネートがもつ抗菌・滅菌作用にあります。腸炎ビブリオ菌やブドウ球菌、かのO－157に対しても強力な殺菌効果が証明されています。

医学的にも高度な研究が進んでいます。胃がん患者のリンパ節転移由来細胞の増殖を抑制するということが分かってきましたし、染色体の異常を抑えたり、突然変異から体を守る効果などが証明されているそうです。



すくすく育つボックス栽培のわさび

わさびは最高の血液サラサラ食品でもあり、また下痢止めにもよく効きます。骨を丈夫にする骨量増進作用が発見され、骨そしょう症にも有効であることが分かっています。

スルフィニルというわさびにしか含まれていない成分が、今流行りのアンチエイジング（若返り）に効果があるということをテレビ「発掘あるある大辞典」が取り上げたり、月刊「百楽」でわさび特集をしたり、マスコミにも頻繁に登場するようになりました。

この、日本が生んだ最強のハーブ・わさびの栽培を松代町（現十日町市）で始める計画に着手したところです。

山の斜面の整地工事と取水管工事がこの春完了しました。まずは小規模な試験栽培を始め、水のデータと栽培技術を蓄積しながら、秋に植えるわさび苗の本数を決定する計画です。湧き水の量と水質で栽培できる苗の本数が自動的に決まります。この意味では、山の自然に任せるしかありません。

わさびの特許栽培方法

写真のように、一メートル四方の箱の中に砂や麦はん石などを敷き詰めて一箱に十六本の苗を植え付け、その根元にひたひたと点滴のように給水する仕組です。通常の、山の棚田状のわさび田で栽培する方法では、苗の生育率は六十％にとどまっていますが、特許栽培法では植えた苗の九十五％が生育します。自然災害に強く、わさび栽培に革新をもたらしました。直営と栽培指導農園は、三月末現在、全国二十四カ所に広がっています。

わさびの将来性

わさびはこれから科学的・医学的な研究が進み、食用だけではなく多方面で活用されていきます。松下電器がエアコンのフィルターにわさびを使っていますし、健康わさびサプリメントや医薬品も出てきます。惣菜弁当の腐敗防止用シートとか冷蔵庫の抗菌用品など、わさびの効能に着目した新商品が続々と実用化されていくでしょう。わさびは将来性豊かな野菜でありハーブであると言えます。

上越地域の中山間地には湧き水の出る遊休農地がたくさんあります。そういう所には、まさに打って付けの、希少で高付加価値の野菜として育てていきたいと考えています。

良い水の出る所がありましたらご紹介下さい。

（上越産業振興研究所調査役・横山由雄）

地域を映す

こどもの眼

川 いきる・人 いきる

■上越教育大学附属小学校４年１組

私たち附属小学校4年1組は、総合教科活動で「川いきる・人いきる」というテーマで、地域にある、いろいろな川に行ってたくさんの活動に取り組んでいます。今まで行った川は、青田川、関川、大瀬川です。今から私たちが出会った川を紹介します。初めに行った川は、春の青田川です。川は、汚れていたけれど、満開の桜が川面に映り、川岸の風景は、とてもキレイでした。次に行った川は、関川です。稲田の工業用取水堰付近に出かけました。関川は、冷たい風が吹き、あふれるほどの水量に、まるで小さな海のように見えました。そこでみんなは、川原の石や砂などの宝物を見つけて、学校に持ち帰りました。次は、私たちが始めて、釣りにチャレンジした大瀬川です。大瀬川では、魚を13匹、カニを16匹捕まえました。鯉もつれます。皆さんも鯉や魚やカニをつかまえに行ってみて下さい。

上越の川はとてもステキなところばかりです。これからも、いろんな川でいっぱい遊びたいです。

［連載小説］

関川物語

―ヨシノボリの冒険が始まる―

今日も関川の水の流れは僕たちを誘い込むようにゆっくりだ。春の関川は本当に気持ちがいい。でも僕たちヨシノボリは今日も男の子に捕まえられそうになった。全く人間ってヤツは、嫌になっちゃうよ。そうやっていつも僕たちはビクビクしながら関川の水底で静かに過ごしている。

ある日僕が遊びから帰ったらお母さんのうなり声が聞こえてきた。「お母さん、お母さんどうしたの。」僕は、夢中できいた。「お母さんはちょっと具合が悪いだけよ。」僕は心配になって、医者を呼んだ。医者は僕に言った。「君のお母さんは、重い病気にかかっちゃったんだよ。」そこで僕は、「どうすれば治るんですか。」と聞いた。「関川の河口底にある秘密の薬草を取ってくるしかないよ。」「え、え…」僕は、驚きのあまり言葉を失ってしまった。僕は、ちらっとお母さんを見た。とても、苦しそうだ。「お母さん、僕が、秘密の薬草をとってくるから待っててね。」

家を出ると、小さなはさみを持ったモクズガニが、せわしそうに足を動かしながら僕の目の前を横切った。「君はどうしたの?」「ぶくぶく…僕は、お母さんが病気にかかって、薬草を取りに来たんだよ。ぶくぶく…」モクズガニは泡をふきながら、慌てて僕にそう話した。なんてことだろう。モクズガニは僕と同じ理由で関川を下っていたんだ。

「いっしょにいこう!」

「僕の名前は、ヨッシー。」

「ぶくぶく…俺の名前は、クランだ。よろしくな。」

「うん、よろしく。」

こうして、関川を舞台にした二人の冒険が始まった。

（つづく）



五・七・五作文

（成田・松本・高橋・沢井・中島・田中・落合・茨木）

関川の　砂がさらさら　海みたい

青田川　桜とともに　生きている

大瀬川　魚とかにの　パラダイス

4の1　川のことなら　お任せだ

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

編集室から

「川」を通して、子どもたちの目に映る地域の自然や環境を物語や詩にまとめてもらうことにした。四季を通してどのような物語が生まれるのか、期待したい。

来年の親鸞聖人配流八百年に向けて、色々な動きが出てきた。親鸞の立宗の背景に「風土が強く影響している」と言われているが、聖人上陸の居多の海だけではなく、頸城全体の自然風土として捉えたい。

わがまちと奇しき縁を持つ能登島のことが以前から気がかりで、ようやく「小浦」を訪ねてみた。奥深い谷地田が広がり、人の気配をまったく感じさせない静けさと、息を呑むような海の美しさが印象的だった。

第6巻3号　9月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」夏号
第六巻二号　通巻二十二号
発行日／平成十八年六月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊
直江の津

発行／平成十八年六月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・太田均

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)